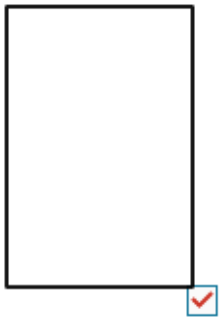
大江家の解体新書

『**解体新書**』は序図・巻の一~巻の四の全5冊から構成され、4巻末尾の刊記には安永3（1774）と記されている。原書は（Ontleedkundige　Tafelen）である。

松村　洋氏の見解

大江家の『**解体新書**』は通常と異なった構成となっている。通常は序図に吉雄耕牛の序・原本の著者クルムスの自序・凡例・図が綴じられているが、大江家の１冊目は吉雄序・自序・凡例と１巻が綴じられ、図はない。2巻から4巻は通常通りで、この他に通常と同じ序図が１冊ある。１冊目と「2～4巻・序図」の組み合せは古書店による寄せ集めであろう。書き入れは１冊目のみである。刊記の板元須原屋市兵衛の住所は室町三町目になっており、寛政2年（1790）以降である。

序



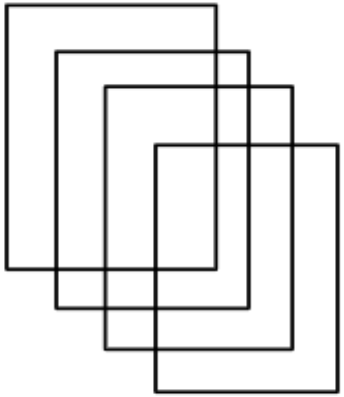
- 吉雄耕牛の序
- クレムスの自序
- 凡例
- 図

『**解体新書**』の発刊は最初の安永3年（1774）から文政8年（1825）頃まで、50年以上の永い間、確認されているが全てが初版本と言える。

松村　洋氏の見解

『**解体新書**』初版本の学術的な価値としては、刷りの順序は無関係です。
特徴のある書入れがある本は、研究対象となる可能性があり、価値が高いといえます。
大江家の蔵本は、この点から価値の高いものと言えるでしょう。

1巻～4巻



松村　洋氏の見解

『**解体新書**』の各蔵本の価値は、古書店での売買価と学術的に見た歴史資料としての価値と二つの側面があります。
古書店価格では、複数の板木が彫られた場合、一般的には初版の人気が高いようす。
しかし、すべて同じ板木から刷られている『解体新書』の場合、印刷の時期で価格に差が生じるか否かは、私も判りません。また、古書店では、書入れはあまり好まれないのではないでしょうか。